
異世界で魔犬な生活

fumia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で魔犬な生活

【Nコード】

N8596X

【作者名】

fumia

【あらすじ】

自殺した後に魔犬へ転生……。この世界とは違う、あり得るかもしれないパラレルワールド。科学と魔法が共存し、世界は不景気を知らず宇宙を目指して邁進し、日本は技術でも魔術でも経済でも一流の超大国として闊歩する。そんな世界で魔犬として生を受けたカイトは、魔法もなく、世界同時多発不況の最中落ちぶれていた日本、という別の世界で暮らしていた頃の記憶を人知れず抱かえ込みながらも、最愛のパートナーであり、マスターである美久の使い魔として魔法学園の平和を守る為に仲間達と共に尽力する。

プロローグ

第一の世界、201X年、日本国某所。

あるアパートの一室に、一人の青年がいた。

夕闇の色が濃くなり、部屋の中がとても薄暗くなっているのにも関わらず、彼はぼんやりとただ一点、これから自分の命に終止符を打つであろう、天井に打ち付けた鉄製の鉤に結び付け、輪を作るように反対の端を結んだ一本の太いロープの黒い影を見つめていた。

コミュ障、内気、根暗、チビ……。顔面偏差値こそ並以上の物があつたが、その他に関しては、その青年はおよそ社会生活に支障をきたす程負の要素で満ちていた。

加えてこの未曾有の経済危機である。それまでは大学生という肩書きがあつたが、いまや就活浪人3年目、収入も社会的な居場所もほぼ完全に無くなり、彼は自分の人生を悲観どころかほとんど絶望していた。

彼以上に紆余曲折を経てきた年長者なら、やる気と根性さえあれば案外やり直しも利くと云う事を経験上心得ているから、この程度で自殺なんて、と呆れたり非難したりするかもしれない。が、生憎彼はそこまでの経験も視野の広さも無かった。紛いなりにも敷かれたレールの上を走って行かざるを得なかった若者にとって、一度でも脱落すると高確率でリベンジする事が出来ない現在社会の仕組みの中で堕ちていく事は、絶望に他ならなかったのである。

青年は静かに立ち上がると、踏み台代わりにした積み重ねた百科事典の上に足を乗せた。

ロープに首を掛けると、建て付けの悪い窓の隙間から、階下の畦道を散歩しているらしい飼い主の女性の、

「ほら、チャッピー！おいで！」
と呼ぶ声とキャンキャンと鳴く小型犬か子犬の泣き声が漏れ聞こえてきた。

犬か……。犬っていいなあ。

喉仏で粗くザラザラとした安物の紐を触りつつ、青年は無意識に考えた。人間と違って、大人になっても家族の一員としていつまでも置いて貰える。警察犬や介助犬、タレント犬等の例外はあるものの、大概の犬は愛玩用として一生を終え、お金を稼ぐ為に働きに出る必要もない。野良になつたら野垂れ死ぬまでだろうが、それは人間だって同じ事だ。違いがあるとすれば、野良犬は人に拾って貰える可能性が無くもないが、住所不定の浮浪者が社会に受け入れられて社会復帰する事は、その手の支援組織の伝手が無ければ一生叶わないと云う程度の物である。

いいなあ、犬。犬、いいなあ。

そう思いながら、青年は足元の百科事典を蹴り飛ばし、宙へ舞い上がった。

何処でもいい、もしも生まれ変われるなら犬に成りたいなあ……。

ロープが首に食い込む。ただでさえ粗いロープの表面が皮膚に食い込み、息苦しさと共に首まで千切れるかと思う程の強烈な痛覚が青年を襲った。

『そんなに犬になりたいか？』

意識が飛んで目の前が真っ暗な闇に包まれていく最中、彼の頭の中にこんな声が流れ込んできた。脳の中へ直接語り掛けてくるような、不思議と神々しい感じがする低い男の声だった。

犬に……なり……たい。

『そうか、宜しい。では汝の願いを叶えてやろう。』

青年の首が力尽きるように項垂れ、四肢がだらりと垂れ下がる。彼の体の真下には、漏れ出した尿が板張りの床の上に丸い水溜まりを形成していた。

そうして青年は、誰にも気付かれる事もなく息を引き取った。

>>犬

真っ暗だ。何も見えない。だけれども暖かい。安心出来る温もりがここにはある。

それもその筈だ。ここは母さんの胎内なのだから……。

突然、締め付けられるような衝撃が俺を襲った。そして訳が分からぬまま、俺は頭から胎盤の外へ無理やり押し出された。

誰かが何かを叫んでいるが、その喧騒さえ意識する余裕が無くなる程体が締め上げられていく。

狭い所に無理やり押し込まれたと思ったら、突然とても広い空間に押し出された。未だに目の前は暗いままだが、鼻や口から空気が入って来るのがわかる。突然肺が空気でいっぱいになって胸が苦しい。俺は思わず息を吐き出した。

キャン！キャン！キャン！

「おお、生まれた！3匹目が生まれたぞ！」

そう叫ぶ人間の男の声が聞こえる。目は見えないが、臭いでそれが人間だと分かった。

俺は、先に生まれた兄貴達の声と母さんの臭いを頼りに、暗中模

索で母さんの姿を探した。

何とか母さんを見つけて次兄の左隣、向かって母さんの頭が向いている方に並び、母さんの腹の下に潜り込むと、俺はホッと一息を吐いた。

これが、俺が犬として初めて体験した事だった。

生まれたばかりの子犬の一日というのは、思っている以上に至極退屈なものだ。

目が見える訳でもないから彼方此方へ動き回れない。必然的に母さんのいる寝床のボール箱で大人しく食っちゃ寝しなければいけない事になる。

ただし、寝る時はいいが俺は5犬兄弟の真ん中なので、母さんのおっぱいを吸う時は兄貴達にも弟共にも毎回気を遣う羽目になる。五つ子なのだから乳を吸う順番とかどうでもいいではないか、と内心想うものの、口に出したら長兄や次兄から蹴りを食らうのが目に見えるので黙りを決めるのが常態になっていた。お陰で空気を読む事だけは秀でる事が出来るようになったと思う。

生まれて一月ばかり経った頃だろうか、ある日俺達が飼われていた家に、沢山の客人が訪れたような雑音が、遙か遠くの居間らしき方から聞こえてきた。

どうやら客人達は会話の様子から3組の家族のようであり、「ねえ、イチローオジサン、ヨシコオバサン。ワンちゃん早く見せて！見せて！」

「まあまあ、落ち着きなさい、ミク。居間見せて上げるからね。さあ、こつちに来てご覧。」

という、どんどん近付いて来る足音と共に聞こえてくる、飼い主と客人の一人である小さな少女らしき声の主との会話から、どうやら客人達は皆飼い主夫婦と親しい間柄の人間達のようにだった。

扉がバタンと開かれる音が部屋中に響く。そしてそれを合図するかの様にパタパタと軽やかに跳ねるような慌ただしい足音が聞こえ、それがやんだ途端、頭の上からさっきの女の子の声が真上から反響した。

「わあ！可愛い！」

不意に、俺は誰かに両側から腹を抱かえ込まれた。

その手はそのまま母さんや兄弟達から俺を引き離さんともするかのように俺の体を天高く持ち上げていく。

「わあ、お母さん！お母さん！怖いよ。助けて！」

無駄な抵抗だと頭では解つていても、俺は母さんに助けを求め、誰かも判らぬ人の胸の中でジタバタと四肢を振って精一杯の抵抗をした。だが初めから母さんも承知の上だったのだろう。母さんは黙ったまま俺の方を見上げているようだった。

抱き抱えられた俺の頭上から女の子の声が聞こえる。

「オジサン。この子、貰っても良い？」

「おっ！ミクはこの子にするのかい？いいとも、持って行きなさい。大切にするんだよ。」

「うん！」

女の子は、俺を胸にしつかりと抱き締めたままトテトと走りだしたようだった。体の揺れがダイレクトに伝わり、母さんと兄貴と弟達の鳴き声が、臭いが、温もりが、遠ざかって行く。

寂しさに耐え切れず、俺は思わずクウーンと泣き声を上げた。

突如、女の子が俺の背中をそつと撫で始めた。その感触は毛皮越しでも解る位温もりと優しさに溢れていた。

それがあまりにも気持ち良かったから、何だかんだ言って俺もまだ餓鬼だったから、いつしか俺は眠りに落ちてしまった。

>>カイト

第二の世界、2030年4月中旬、日本国立中央魔法学園高等部生寮第1号棟、瀬川 美久の部屋。

「カイト！もう朝よ、起きなさい！」

朝っぱらから部屋中に響き渡る美久の五月蠅い怒鳴り声で叩き起こされた所為で、俺は寢床に敷かれた毛布から飛び上がった。

「五月蠅いな、起きたよ！」

開口一番文句を言っていると、我がマスターは顰め面をした。

「カイト、あなたね。わたしの使い魔として大分経っているんだから、もう少しそれらしい自覚を持って頂戴！」

「ハイハイ……。」

生返事を返しつつ、いつの間にか彼女に引き取られてから5年以上経っている事に思い当たった。当時は10歳、生まれたばかりだった美久と俺も、今や15歳の高校生と5歳の子犬である。おっと、今俺がいるこの世界での魔犬は10歳で成犬とされている。だから5歳の子犬と云う表現は誤記ではないぜ。悪しからず。

「ほら、さつさと御飯食べて！わたしが遅刻しちゃうわ！」

「ほーい！」

投げつけられるようにマスターから渡されたドッグフードを盛りれた円形の青い器を受け取ると、俺は茶色いドッグフードの山に顔を突っ込んで一気に平らげた。

食事を終わると、俺は美久によって魔術調教用の首輪を付けられる。さあこれで準備は万端だ。

「行けるよ！美久」

「じゃあ、出掛けるわよ！」

「よしてきた！」

さあ、今日も一日頑張ろう。

第一話：俺の日常

>>カイト

エレベーターで1階まで降り、急いで1号棟の外に出る。

建物の外に出ると、正面に2号棟の、向かって左側に当たる南側に3号館の玄関口がある。それぞれの建物は煉瓦敷きされた1万平米の正方形の形をした中庭をコの字を描くように取り囲んでいた。そして右側、北の方向へ目を向けると中庭と表通りを仕切る高等部寮の大きな黒い鉄製の門扉が目に入る。

上を見あげれば、三方向を20階建ての大きな寮の建物が群青色の空を真四角切り取っている。今日もいい天気だ。

いい気持ちで空を見つめっていると、風に流されてプカプカと気持ちよさそうに高みに浮かぶあの白い雲まで届きそうな程の大声で美久が叫んでいるのが、嫌でも俺の俊敏な耳の中に入ってくる。

「カイト、早く！変身よ！」

まるで拡声器を耳元に当てられて絶叫されたかと思える程だ。そこまで大声で怒鳴らなくてもちゃんと聞き取れるのに……。犬の聴覚舐めるなよ。吃驚し過ぎて頓死したらどうするのだ？御主人様よ。

まあ、ボーっとしていた俺も悪いのだけれどな……。

「よし、じゃあ、変身するぜ！」

俺は掛け声を掛けると、四足を踏ん張ってバネのようにしならせると天高く飛び上がった。そして空中で1回バク転をすると、俺はフルサイズの大きな3ボックスセダン型のシルバーメタリックの乗用車に変化した。俺が前世を人間として過ごしていた世界で走っていた200系クラウンという車だ。勿論、今いるこの世界では走っていない車である。

というより、この世界ではガソリン車その物が絶滅してしまっている。皆魔力補助で動く電気自動車だ。超速充電と超容量蓄電池、長距離高速走行対応高出力モーター、急速充電施設等のインフラ整備……。そうした壁を人類は突破し飛躍的な進歩を遂げたのだ。それだけじゃない、放射性物質の安全な最終処分及び再生技術が確立されてからは、核融合による原子力で動く物も一般に普及しつつあった。

俺は左側にある助手席のドアを勢い良く開けると、我が主を俺の中へ招き入れた。

「カイト、あなた、時々変な物に変身するわよねえ。」

美久はそう言って溜息を吐くと、座席の上に座り込んだ。正直一言多いよ！と言わざるを得ない気がする。まあ、言ってみた所で、俺達犬の言葉は人間にはワンとかキャンとかワオーンとしか聞こえないだろうから口にするだけ無駄だろうが……。

だが、しかし……。

「何？何か文句があるの？カイト。さっさと行きなさい！GO！」
何となく此方の意思も向こうにも通じているような感じがするのだから、世の中不思議な物である。

俺はグルルと唸って気合を入れると、門に向かって駆け出した。

魔犬とか、魔猫とか、そういった魔法能力を所持する生物には、当たり前だけどそういう魔術的な先天性の能力を所持している。俺の場合、変身能力だ。

だが、ただの変身能力じゃない。道具限定とはいえ、一度でも記憶に留めた物ならばどんな物にも、それが自分より大きかろうが小さかろうが関係なく、その機能まで完全に再現する事が出来るのだ。だから俺のマスターである美久が遅刻しそうであればこうして車に変身して送ってやれるし、もしも彼女が杖や文房具等を忘れて窮地に陥れば、それに変身して急場を凌がせる事だって可能なのだ。

しかもそうした物の記憶は、今までだけではなく前世の物であっても何故か適応される。そういう訳でこの世界には存在しない筈の物でも変化する事が出来るのだ。

……と、大見得を切ってみたが、勿論限度つて物がある。流石に俺でも100人以上乗れるジェット機のように超高速で空や宇宙を飛び回る飛行機とロケットや、深い海の底へ潜る潜水艦や地中を掘り進む巨大掘削機のような特殊環境で働く大型機械、2両以上の編成の列車、目に見えない位小さなナノマシンになる事は出来ないぜ。あくまで地上で日常的に活躍している普通の道具に限られる。残念だけどな。

大通りを、国立中央魔法学園、美久が通っている国内で一番権威がある幼稚園から大学まで一貫教育を行う魔法学の専門家養成機関へ向けて疾駆する。

郊外にあるとはいえ、都心に近い立地的な要因も大きいのだろう。広い中央分離帯があり、一直線に伸びる片道3車線の大きな道路の両側には、10階よりも高いビルが林立し、歩道や車道には人が溢れ、活気に満ちている。でも、だからといって渋滞して立ち往生する訳ではない。最新の信号システムと交通環境整備事業によって、極稀に起こる交通事故と工事事業を原因とする物を除いた自然渋滞は過去の物になったのだ。

交通だけじゃない、近代科学技術、医学生物学、魔法学、その他様々な方面で日本国は大躍進を遂げていた。バブル期の実態のない偽りの経済繁栄から、実態の伴うそれへの転換を上手く成し遂げ、島国ながら世界一の経済国として念願の常任理事国入りも果たし、強国の一つとして世界に君臨する事になったのである。俺が前世を過ごした世界の日本とは正反対だ。

バブルが弾けた途端に活力を失い。数だけ多い団塊世代が蔓延って若者をないがしろにし、結果的に行き詰まると素晴らしい技術

という過去の遺産を切り売りして食い潰し、移民や隣国、果ては世界からATMとして集られ、売国奴と共に失墜していった国と、それを転換期と前向きに捉えてさらなる発展を遂げて名実共に最強になった国。魔法の有り無しは別として、世界が違っただけで同じ様な民族が同じ様な歴史を辿ってきた筈なのに、どこでどうしてここまで差がついてしまったのだろうか……。不思議でならない。

そんな魔犬らしくもない事をぼんやり考えつつ走っていると、

「よっ！雑種！」

と言う、聞き慣れた雄犬の声が左後から聞こえてきた。

振り返るまでもなく声の主は大体想像出来たから無視を決め込むと思ったが、そいつは俺の左隣にぴったりと張り付いてきた。紅い色が映える派手なスポーツタイプの大型のMTのオートバイに変身した柴犬のムックと、その上に跨る彼のマスターの高町 柑奈という、肩まである長い茶髪を結んでツインテールにした貧乳美少女である。ヨークシャー・テリアとスコティッシュ・テリアの混雑種で四輪車に変身した俺と、セミロングの艶のある黒髪の美少女で、しかもHカップな巨乳の我がマスターとは好対照である。

「おはよう、美久！」

「あら、おはよう。柑奈。」

御主人様達が和やかに朝の挨拶を交わす中、当の俺達は犬語で口喧嘩をする。

「五月蠅いな、和犬！雑種は雑種でも此方は血統書付きのテリア犬だ！英国紳士舐めるな！」

「はあ？英国紳士だって？聞いて笑わせらあ！先祖はイギリス生まれでも、お前は生粋の日本生まれの日本育ちじゃないか。」

「うゝゝゝっ！兎に角、雑種言っ——！」

「じゃあ、チビ！」

「うわ——ん!!」

チビ、と言われて俺は思わず泣きそうになった。というより泣いた。ただでさえ短足胴長で分が悪いのに、向こうは同じ年頃の子犬の割には大柄、こっちは小柄である。優位に立てたところで精々、大きくなり過ぎたムックと違い、小さくて可愛い俺はマスターの胸に抱かれる事も、ベッドに潜り込んで縫いぐるみのように彼女の懷で添い寝する事も許されている事を心の中で誇示する位しか優位に立てる物がない。悔しいが勝てる気がしない。

そんな中突然、

「ねえ、美久。学校まで、どっちの使い魔が早く到着出来るか、競争しない?」

と、柑奈が突飛な提案をした。美久も最初こそ、

「止めなさいよ。あまり感心できないわ。それに、わたし、風紀委員よ。出来る訳ないでしょう?」

と諷めたものの、結局根負けして友人の言に乗る気になったようだった。

「おい、どうするよ?」

ムックが俺に囁いた。

「俺は何時でもOKだぜ!」

勿論、俺だってマスターがやる気ならば異論はない。

「望むところだ!後悔するなよ。」

と受けて立った。

そして柑奈の、

「よーい……ドン!」

と言う掛け声を合図に、俺達は全力で加速した。

ムックは、

「ハイド——!!」

と声高く叫ぶ柑奈を乗せたまま、前輪を高々と上げるジャックナイ

フをしながら急加速した。バイクの加速力には及ばないものの、彼のすぐ後ろを追跡するように、俺も後輪にホイールハウスを押し付ける感じでケツを下げるとギアを落として一気にエンジンを全開させた。

出足こそムックに負けるが、最終的な到達加速度と最高巡航速度は俺の方が速い。あつという間に俺はボンネット分彼の前に飛び出し、競り合うように並走する。

ところが哀しいかな。車と車の間をすり抜けられるバイクと違い、自動車は他の自動車を車線変更して避けなければ追い越す事が出来ない。もしも道路いっぱいに車が並走していたら、その内の一台が退いてくれるまで大人しく後ろで待っていなければならぬ。そんなこんなしている内に、ムックと柑奈の後ろ姿は車の流れの中へと消えて見えなくなっていく。

そうして、今日も俺は見事に惨敗した。学園の正門の前で、バイクの変身を解いて赤毛の柴犬に戻ったムックが得意げな顔をして、やっと到着した俺を見つめているのが何とも腹立たしい。少なくともここ50戦位ストリートレースでは連続で負け続けている筈だが、多過ぎてもう数える気力もない。

俺は美久を下ろすと、自分も元の魔犬の姿に戻り、地べたに四つん這いに座り込むと、体を冷ます為に舌を出してハアハアと吐息した。正直、物凄くスタミナを消耗するので疲れたのだ。

出来れば少し休みたいのだが、現実はそのよう甘やかしてはくれないらしい。

「こら、カイト！何座り込んでいるの？置いて行くわよ。さっさと歩きなさい。」

と、我がマスター美久は俺をしきりに責付いた。

「嫌だ！疲れた！もう歩けないよ！抱っこ！抱っこ！」

俺は大声で喚いて美久の足元をコロコロと転げ回りつつ駄々を捏ね

た。

「抱っこ！抱っこ！抱っこ！抱っこ！」

「あ——、もう、分かった、分かった。そんなにキャンキャン喚かないの！本当、甘えん坊なんだから。」

俺の想いが通じたのか、美久はしゃがみ込むと両手でそつと俺の胴体を持ち、その豊かな胸の中に抱き寄せた。ぷにぷにとして弾力もある柔らかい乳房に顔を埋める感覚が心地良い。こうして頭を撫ぜられながら、赤い軽量プラスチックのフレームのスタイリッシュな眼鏡を掛けた彼女と目を合わせていると、自然と優越感のよくな気持ちに浸る事が出来る。使い魔とはいえども所詮、俺も愛玩動物と云う事か……。

広い高等部の敷地を美久に抱き抱えられつつ進んで行く。目の前には5階建ての近未来的な雰囲気を漂わせた銀色に輝く大判の一枚硝子を多用した校舎が聳え立っている。幼稚園から大学まで共学で一貫教育を施す巨大学校法人の高等部の敷地なのだから、大きくて当然のような気もするけれども、やはり魔法技術のエキスパートやスペシャリストを養成する為の日本で唯一の専門教育機関であるという先入観を与えられているからか、中々に立派に見えた。

勿論、魔法学とか魔術概論、分析魔法学、使役魔法学、魔術工学、幾何魔方陣理論分析学……といったような魔法関連の勉強の初歩を学ぶ為の学校なのだが、普通科で勉強するような、現代文学、古文、漢文、数学、英語、生物学、物理学、化学、地学、政経学、地理学、歴史学、哲学、論理学、保険体育と一通りの学科も学習する。そして魔法よりもそれ以外の勉強に一日の大部分を割く。結果的に魔法以外ではお呼びでない俺達は必然的に邪魔者になってしまう。

そんな使い魔達が必要でない間、学園では学生たちのそれらを校舎の一角で纏めて預かるというサービスを行なっている。云わば使

役魔獣の保育園だ。

俺を抱いたまま校舎の中に入ると、下駄箱で上履きに履き替え、そのまま廊下を進んで校舎の1階の隅に造られた保育スペースへ美久は向かった。そこで受付の若い女性の職員に、彼女は俺を委ねた。「じゃあね、カイト。午後の魔法の授業の前に迎えに行くから、良い子にしているのよ!」

「解った!する!」

尻尾を上へ上げてフリフリと振りつつ、美久にバイバイをする。彼女もまた俺に向かって軽く手を振ると、そつと背を向け柑奈と共に何処へと去って行く。入り口の自動ドアの硝子越しにじっと見つめていると、廊下の角を曲がったのか、急に彼女等の姿は見えなくなってしまうた。

さて、何して遊ぼうか？

ムックとの競争で思いの外早く来てしまったからだろうか、普段は皆で取り合いになるような玩具も、幾つかは誰からも占有されずに灰白色の大理石の床の上に放置されている。しかも今一番人気があるスケボー、その内の一台の橙色の奴がまだ壁に立て掛けられているのが目に入った。

俺は一直線にスケボーの元に駆け寄ると、それを床に倒し、前足を乗せ、勢いを付ける為に後ろ足で床を蹴って走り出した。

トトトス——イ、トトトス——イ……。

前足をスケボーの後ろの縁に添え、後ろ足で走りながら押しまくる。本当はボードの上に立ちたくて仕様が無いが、短足胴長だと中々難しくもどかしく感じる。

だけれど、これはこれで何か楽しいな、と思える自分もいる。何だかよく分からない。

「邪魔するぜ！」

突然、そんな声と共にムックが俺の押しているスケボーの上に飛び乗って来た！途端にボードの重さが増え、ボードの速度が鈍る。

「おい、カイト。何してんだ？遅くなったぞ！」

お前が乗っているからだろうが——っ！！！！降りろ、馬鹿

——！！

文句を言おうと口を開いたその時、

「あらあら、相変わらず仲が良いのねあなた達。」

と茶化す雌犬の鳴き声が聞こえてきた。声のした方を振り向くと、そこには淡い銀色の毛並みが眩しい御年9歳のプードルのルカ姐さんがニコニコしながら立っていた。

「おはようございます。ルカ姐さん。」

俺は歩みを止めて彼女に挨拶をした。

「でも、俺達そんなに仲がいい訳ではないですよ。」

「あら、そうなの？」

「そうですよ。」

俺は保育園にいる雌犬の中で一番の美貌を誇る、憧れのルカ姐さんに声を掛けられたのが嬉しかったので、ついスケボーから前足を離してしまった。

気が付いたら、俺の目の前からムックと共にスケボーが消えていた。

この中央魔法学園には、使い魔を使役する授業や訓練を行う初等部高学年から大学までの校舎や敷地の一角に必ず魔犬や魔猫等の愛玩魔獣を生徒や職員から預かる保育施設が併設されていて、それぞれに保父さんや保母さんと称される世話専門の職員が数十人在籍している。

その中に、群山さんと他の職員から呼ばれる、いつも薄鶯色の縫れた上下の作業着を着た、少し頭頂部が禿げた小太りの中年男性がいる。

このおっさん、いつも作業着のズボンの尻側のポケットに、ポケットが膨らみ過ぎてビロンビロンになるまで細かく刻んだビーフジャーキーを突っ込んでいて、俺達が強請るとそれを一枚だけ分けてくれるのだ。

今日も群山さんは後頭部を掻きながら俺達の前に姿を現した。勿論、ポケットの中は干し肉でパンパンになっている。

俺は群山さんに近付くと、肉を貰う為に後ろから彼の尻の辺りに飛びついた。

「ねえ、ねえ、ビーフジャーキー頂戴！頂戴！」

「ん？おや、お前、瀬川 美久ちゃんの所のカイ坊じゃないか。」
群山さんは足元にいる俺に気が付いたのか、振り向くとそう呟いた。

「なんだ、またこれが欲しいのか？全くお前はこれが好きなんだなほれ、やるぞ！」

「やった——！わ——い！」

おれは群山さんがポイッと放り投げたビーフジャーキーの欠片を口で受け捕るとモグモグと頬張った。美味しい。やっぱ肉美味しい。美久はいつも栄養価こそ高いけど不味いドッグフードしかくれないからな。こうやって保父さんや保母さん達が分けてくれるお菓子やおこぼれが俺の日々の楽しみの一つになっている。

お昼にも、アルミニウムの皿に盛られたドッグフードやキャットフードが給食として出て来る。ただ、澱粉やヘテロ多糖をベースにして、必須アミノ酸と必須脂肪酸とビタミン類の他にほうれん草か何かのペーストを練り込んでフリーストドライ処理をした、変な黄緑色をした球形のペレットだったので、味はそれ程悪くないのに頗る見た目が気持ち悪い食べ物だった。何をどう頑張っても、犬猫の餌とは思えず、はつきり言って錦鯉のそれと形容した方がしっくりとくる代物なのだ。

見た目からして食欲が減退するが、やはり腹の虫には敵わない。
結局食べてお腹いっぱいになり、満足して昼寝をする。

午後になると、魔法の授業で使役する為に、美久と柑奈のクラス
の学生達が挙って俺達を迎えに来た。

騒がしい雑踏の中、臭いと彼女の足を頼りに俺は美久を捜して徘徊する。そして何とか彼女の姿を見つけた俺は彼女の胸の中へ飛び込み、そのまま彼女によって俺は魔法学実習室へ連れて行かれた。

実習室で行う使い魔の使う授業は、的確に指示通りに使役魔獣が動くように、変身や攻撃などの魔法能力の向上を図る訓練の他、主人の云う事を聞かせる、お座りとか伏せとかお手とか、基本的な躰を施す訓練を繰り返してやらせられる。

正直言って、既に楽勝に出来る程度の事を、毎度毎度うんざりする程反復してやらされるから退屈で仕方がない。しかし、

「カイト、お手！」

「はい！」

と命じられた通りの動作を遂行する度に、

「よし！ご褒美！」

とおやつのお菓子が与えられるので、少なくとも俺はその瞬間の為にだけにこの授業に真面目に取り組んでいた。

そうして放課後になると、美久は高等部の風紀委員の活動の為に校舎の4階、生徒会室の真下にあつて委員の詰所となっている部屋に向かい、俺も一緒に付いて行く。

そして手紙などの書類を言われた場所や人へ届けたり、パトロールをして風紀を乱す不逞の輩を吠えて威嚇したりと、他のメンバーの使い魔達と一緒に風紀委員達の手伝いをするのである。

鋼鉄製の重厚な両開きの扉を開け、他の教室に比べてもそれなり

に広い風紀委員会室に美久と共に入ると、1人の女性教師と2人の女生徒、そして3人の魔犬が寛いでいるのが目に入った。

女性との内の一人は今朝も会った高町 柑奈で、足元に彼女の使い魔である柴犬のムックが座っている。もう一人、腰まである綺麗なストリートロングの綺麗な黒髪に、制服がパンパンになる程の爆乳を持つ美少女は知恩院 麗美という3年生の風紀委員長で、その腕に抱くプードルのルカ姐さんのマスターである。

最後、紫掛かった黒いスーツをビシッと着こなした、長い髪を頭の後ろで団子に結んだ30半ばの面長の美人が、この風紀委員会の顧問を務める鏡 智子教諭である。そして彼女のスレーブとして、長年公私ともにパートナーであるのが、俺達の長老にして御年30歳、漆黒に輝く毛が今なお凛々しい、元警察犬のジャーマン・シェパードの光圀公である。

他にも3年生男子の副委員長とその使い魔の三毛猫とか、かなり沢山のメンバーとスレーブ達が居るが、同じ犬だからという至極単純な理由で、俺達はこのメンバーでいつも固まっていた。

俺が美久の胸元から飛び降りると、御老公とムックの所へ向かった。

「遅れてすみません。」

俺がそう詫びると、光圀公は鷹揚に構えながら、

「別に構わんよ、カイト。特に詫びる事もあるまい。わしらも今し方来たばかりだし。」
と穏やかな口調で応えた。

そんなこんなで帰宅時間になると路線バスに乗って、美久と俺は寮の部屋へ帰還する。

美久が寮の食堂へ行っている間に用意された夕飯のドッグフードを食べ、彼女が宿題をする為に机に向かっている傍らでソフトボールを追いかけて戯れている内に、入浴の時間になった。

美久は着替えとバスタオルを2枚用意すると、服を脱いで裸になり、

「カイト、おいで！お風呂に入るよ。」

と俺に向かって呼び掛ける。

「ほいさっ！」

とその場で飛び跳ねると、俺は飼い主の所へ向かって駆け出した。

寮の部屋の浴室にはペット専用の洗い場が設けられているので、俺は基本的に毎晩美久と一緒に風呂場に入り、美久が体を洗う合間にシャワーのお湯を掛けて俺も軽く埃を流して貰うのである。

本当は月に一度しか使わない犬用シャンプーですつきりしたいのだけれど、犬は皮膚が繊細で弱いから、月一以上のシャンプーの使用はいけないのだそう。以前、いつもお世話になる掛り付けの獣医のちよび髭先生が美久にそう説明していたから、たぶん本当の事なのだろう。物足りないなあ、と思いつつも今夜も頭の上からお湯を掛けられる俺なのだ。

風呂から上がると、美久によってバスタオルで毛に纏わり付いた水分を拭われる。そうしてさっぱりすると、俺は寢床になっている淡い水色の一辺50cm程の立方体の横倒しにされたカラーボックスの中に入り、腹這いになって体を丸め、そっと目を閉じた。

美久はまだ椅子に座ってテレビを見ているらしいが、よく分からない。気が付いたら朝が来て、また美久に叩き起こされるだけだ。

そんな感じの俺の日常。

第二話：俺に求愛？

>>カイト

「ブンブンブブン！ブンブンブブン！」

「ウ——ッ！ファンファンファン！」

放課後の風紀委員会室。白い大理石のタイル敷きの床の上で、それぞれ10分の1サイズの車の玩具、丁度ドリフト専門のラジコンの模型と同じ大きさに変身した俺とムックは、鬼ごっこならぬ『交通警察24時ごっこ』をして遊んでいた。

ド派手な装飾と電装を付けまくった珍走団の違法改造車を、やる気のないY31セドリックな覆面パトカーがまったりと追い駆ける、実に平和的な追い掛けっこである。

「パラリラパラリラ——」

「ウ——ウ——、待て、待て——！……ガッ!?」

「……………」

いきなり誰かに頭を押さえつけられ、吃驚した拍子に俺は元の姿に戻ってしまった。異変を感じたのか、ムックも立ち止まって変身を解き、俺の方へ振り返った。

視線を上にとやると、右の前足をお手でもするように俺の頭の上に置くルカ姐さんがそこにいた。気の所為か、不機嫌そうに眉間に皺を寄せ、俺の顔をメツと睨んでいる。折角の美人が台無しだ。

「カイト、それにムックも……。あなた達、いい加減にしろ。」

ルカ姐さんの口調は静かだったが、鈍感な俺達でも容易に察せられる位怒気に満ちた物だった。

「あなた達、まだ遊び盛りの子供だからはしゃぎたいのは分かるけれど、マスター達の迷惑になるから静かにしろ！」

言われて周りを見回してみると、学生達が部屋の彼方此方で忙し

く立ち回り、仕事に勤しんでいるのが見て取れる。

それまで黙っていた黄門様も、好々爺らしくにこやかに微笑みながら、

「まあまあ、ルカや。そう目を三角にする事もあるまいよ。……ただ、カイトもムツクも、もう少しＴＰＯを弁えなければいけないかったかもしれないの……。」

「ご尤も、その通りです御老公。確かに騒ぎ過ぎた感がある。でも、思い切り遊びたい。俺はムツクの方へ振り返り、彼にこう提案した。「グラウンド、行こう！」

「賛成！」

風紀委員室の扉には、下の方に蝶番で留められたプラスチックの板、もとい犬猫用の出入り口のドアが造られていて、頭で押してパカパカと揺らす事で、俺達のような犬猫でも人間に開けて貰わずとも部屋の内外を自由に行き来する事が可能ようになっていた。

先に穴を潜って廊下へ出ていったムツクに続き、ドア板を頭で押し上げて上半身だけ部屋の外へ乗り出すと、

「競争だ！」

とだけ言い残して、彼は俺から見て右の方へさっさと走り去ってしまった。

「わあ、待つてよ——！」

俺も慌てて廊下に這い出ると、ムツクの尻尾を追い掛けた。

階段に向かって廊下をピョコピョコと駆けて行く。そしていざ、階段と廊下との交差点に差し掛かった刹那、右側手前にある上階とを結ぶ階段の所から、鮮やかなゴールデンベージュ色をした一匹の子犬が突如俺の目と鼻の先に飛び出して来た！

「危ない！」

俺はそう叫びながらも、咄嗟に避けられる空間を直感的に把握し、階段と反対側、向かって左手にある廊下の窓の方へ飛び上がった。そうして、辛くも正面衝突の危機は避けられたが、代わりに俺は廊下の窓下の壁に激突し、鼻先に物凄い衝撃と激痛を感じて七転八倒する羽目になった。

前足で鼻を押さえて蹲っていると、

「だ……、大丈夫ですか？」

と、少し気弱な印象を受ける細い声が頭上から聞こえてきた。瞼を開けて声のした方へ目を向けると、先程ニアミスし掛けた奴だろうか、夕日を浴びて金色に輝くフワフワとした毛並みが愛らしい、俺と同じ位の年頃のジャーマン・スピッツの女の子が不安気な表情で俺を見下ろしていた。

俺だって男の子！女の子を前で何時までも無様な格好を晒すのは本分ではない。まだ痛む鼻を右前足でさすりつつ、俺は立ち上がってスピッツの方へ振り返った。

「大丈夫！大丈夫！平気、平気！」

俺は強がって、というより彼女を安心させる為に無理矢理笑顔を作ると、ピョンピョンとその場でジャンプしてみせた。気の所為か、彼女もクスッと笑ったようだ。

俺はスピッツの女の子の元にそつと歩み寄ると、

「君こそ大丈夫？怪我をしてない？」

と彼女に一応訊ねた。はつきり言って傷一つ見当たらなかったから平気だろうとも思ったが、念の為だ。

「あつ……、大丈夫です。」

そう口にしたものの、何故か彼女は俺から顔を背けるように俯いた。その様子を見て俺は、大丈夫なのか？そう言って本当は苦しいのか？それとも単に俺の顔を見たくないだけか？と両方の可能性を疑ったが、何方にせよ何となく小馬鹿にされているようで気分が悪

かった。

まあ、何だ……。本人が大丈夫と言っているのだから何の問題も無かるう。俺はムツクの所へ行こうと彼女に背を向けた。

その時、

「あ……。あの……。」

と、またスピッツの雌犬から声を掛けられたから、何だろうか？と不思議に思いつつも俺は彼女の方へ振り返った。

「名前……。あなたの名前、何ていうの？」

「名乗る程の名じゃないよ。ごめんね。俺、今急いでいるんだ。じやあね！」

「あつ……。！」

彼女が何かを発し掛けた気がしたものの、構わず俺は下り階段へ向かって駆け出そうとした。しかし……。

「カイト！そこで何をしているの？！すぐに戻って来なさい！」

と叫ぶ、廊下中に響く位大きな美久の声と、調教訓練用ホイッスルのピ——ッ！とけたたましく鳴る音を俺の耳が捕らえた。

風紀委員室のある方へ目を向けると、委員室の開いた扉の隙間から上半身を出して此方を見つめている美久とばかり目が合った。

何の用事かは知らぬ存ぜぬだが、見つかってしまつては仕方がない。俺はお外で遊ぶ事は諦めて、風紀委員室へと引き返した。

左足で押さえるようにドアを開けたまま、しゃがんで両手を伸ばして待ち構えていた美久の腕の中に俺は飛び込んだ。

俺を抱き締めた美久が立ち上がって、扉を閉めて部屋の中に入ろうとした瞬間、部屋の奥で麗美と雑談していた柑奈が、美久に声を掛けてきた。

「ねえ、ウチのムツク知らない？」

「さあ……。」

「外のグラウンドにいるよ！」

美久は首を捻ったが、俺はムックとさつきグラウンドで遊ぶ筈だったばかりなので、鼻先をドアの方へ向けてワンワンと吠えて教えて上げた。

程なくして、ホイッスルで強制的に呼び戻されたムックも風紀委員室へ帰ってきた。

特にやる事も無いので暇で仕方がないが、騒ぐ訳にもいかないし、外で遊ぶ訳にもいかないようだ。退屈だな……。俺は俯せで床に伏せると、

「ふわわ〜ん。」

と欠伸を出してしまった。何だか淒く眠気がする。

あまりにも暇過ぎるので、俺は一人で『自動車教習ごっこ』をして遊ぶ事にした。何て事はない、さつきと同じ様に10分の1サイズの色々なサイズの車に変身し、机の脚や鞆等、部屋の中にある色々な障害物を利用して、S字や車庫入れの練習を黙々と一向繰り返し。

何故そんな事をするのか？と犬仲間からもよく疑問を投げ掛けられるが、勿論こういう事を反復して修練するのには、ちゃんとした理由がある。俺達魔犬は自動車に変身すると、前方とサイドミラーから見える範囲しか視認する事が出来なくなってしまうのだ。自分の左右と真後ろを目視する事が全く出来なくなってしまうのである。だからこそ、限られた視界と耳から入る情報と勘から周囲の状況を的確に判断し、大きな車体を取り回せなければいけないのである。魔犬だから、自動車としては未登録だからと言って事故を起こしていい訳ではないからだ。

俺は100系マーク？の精巧な模型に変身すると、静かに、そしてゆっくりと部屋の中を走り始めた。

人々や魔獣達が行き来する部屋の中を、ぶつからないようにタイ

ミングを図りながらグルグルと回り、徐々に速度を上げて行く。

ドリフト走行を一度もせず、グリップだけに頼りつつ際どい所で学生達が足に履いた靴を避け、自分の車幅とほぼ同じ隙間を減速せずに通過する。それだけでもヒヤツとする場面が多いのに、前方に視点を固定したままりバース走行で同じ事を再びやる。嫌でも勘が冴えるというものだ。

普通の乗用車だけではない、大きなバスやトラックの模型や、時には軽自動車のそれにも変身して同様の事をし、車種や車格による挙動の違いを頭に叩き込んで行くのである。

「風紀委員長はいますか！」

と叫ぶ威勢のいい声と共に、風紀委員室の扉がバタンツと勢い良く開け放たれた。

トラックの姿を解いて、誰だろうか？と身構えていると、犬や猫を一匹ずつ胸に抱いた3人の女学生がカツカツと床を鳴らしながら闊歩して部屋の中へ入ってきた。

先陣を切っているのは、二重瞼の癖に三白眼の、険しいオーラを纏っている、大きく胸が張って腰が括れている、スタイルの良い眼鏡を掛けた面長で鼻筋の通った、薄っすらと茶掛かった長い黒髪をポニーテールにした、ハツと息を呑む程の美少女である。

その少女の容姿の怜悧な美しさにも驚いたが、彼女が大切そうに胸に抱く魔犬を見て、俺は目を丸くした。さっき廊下で危うく衝突しかけた黄金色のスピッツの雌犬である。

彼女の方も俺を発見したのだろう、前足を彼女の飼い主の右腕に掛け、上半身をグツと乗り出すと、

「あつ！カイト君だ！」

と、開口一番そう言った。

何でお前、俺の名前を知っているのだ？と一寸度肝を抜かれたが、よく思い出したら、先刻美久が俺を呼び戻す時に思い切り俺の名を大声で呼んでいたのだっけ……。

そう自己完結で納得しつつも、やはり氏名すら知らない赤の他人、否他犬に親しげに自分の名前を呼ばれるのは癪に障る、というより何処か歯痒いものがある。何だろ、この気持は……。向こうが自分の事を多少なりとも知っているのに、自分の方は一切相手の素性が不明である。そう云う一種の疎外感とでも表現しようか。何とも言えぬ複雑な気分である。

何より厄介なのは、普段は大きくて愛らしいだろう彼女の目が真っ直ぐ俺を捕らえ、その瞳が不気味な位爛々と輝いている事だろう。その悍ましさ故に、俺は彼女の眼から視線を逸らす事が出来ず、ただ凝視した。

さて、どうしたものか……。と思索している所に誰かが俺の左肩の上に前足を置いた感覚がして、俺はこれ幸いと顔を左に向けた。……ムックだった。何か良からぬ事を考えているのか、ニタニタと嫌な笑いをその顔に浮かべている。

「な……。何だよ？ 気持ち悪いな。」

「いやあ、カイト。お前も隅に置けないなあ！ この、この……。」「思わず反射的に仰け反った俺に更に近付くと、ムックは右の前足の指でツンツンと俺の鼻先を突付いた。

「いつの間にか、あんな可愛い娘と……。なあ、何て言う名前なんだよ？ あの娘。」

こいつ、あれが俺の彼女（のような者）だと勘違いしているな。俺は直ぐ様首を横に振って、

「いや、彼女じゃないよ。名前だって知らないもの。」と否定した。

すると、話を聞きつけたルカ姐さんが俺達の会話に割り込んでき

た。

「あら何、カイト。あなた、あの娘の名前も知らないの？ 凄く親しそうなのに。冗談も程々にしなさいな。」

やはり女性の方はこういう色恋話が好きなのか、普段は済ましている姐さんがやけに乗り気で話に参加したので、俺は些か驚いてしまった。

「いや、いや！ 親しいも何も。さっき廊下で危うく衝突しそうになった……、っていうだけで、俺は彼女とは何の面識也没有ですよ。姐さん。」

「でも、彼女、あなたの名前を知っているじゃない。本当に面識がないの？」

「彼女が俺の名前を知っているのは、多分、その場でマスターが俺を大声で呼び戻したからですよ。」

「以前会った事があるとか、忘れているとかはなくて？」

「断じて無いです！」

「そうなの？」

唾が飛びまくる程の勢いで滅多矢鱈と捲し立てた俺と、未だ恍惚とした表情で俺を見下ろすスピッツ犬を交互に眺めながら、ルカ姐さんは怪訝そうに首を傾げた。

「とてもそうは思えないけれど……。」

「おいおい、見損なっただけ、相棒！ 女を惚れさせて於いて白を切るなんて。そんな卑怯者、漢の風上にも置けないぜ！」

ムックからもそう責め立てられて、俺は酷く閉口した。

「ねえ、ねえ、そのジャーマン・スピッツちゃん。」

俺と話していても埒が明かないと思ったのか、ルカ姐さんはスピッツの少女の方を仰視し、彼女に話し掛けた。

「あなた、お名前は何て言うの？ お年は幾つ？」

スピッツの女の子は、ちらりとルカ姐さんの方を見下ろすと、元気な可愛い声でこう答えた。

「アイリーンです。4歳になります。」

「そう……。ねえ、アイリーン。この子……。」

と、ルカ姉は左の前足で俺の頭頂部を軽く叩いた。

「……の何処が気に入ったの？薄情な事に、この子どうして自分があなたに好かれているのか全然解っていないらしいから、あなたから教えて上げて。」

時々ルカ姐さんは明るい笑顔で楽しそうにとんでもない事を口にする。そう、今この時のように……。もう嫌だ。何この公開処刑？ただでさえピリピリと張り詰めているのに、アイリーンの返答次第では此方の精神的なダメージの度合いも半端無いのですが……。

ただ、俺もアイリーンが何故俺を気に入った（？）のか何となく気に掛かる。それはムックもルカ姐さんも同じらしい。俺達は一勢に彼女の方を仰ぎ見た。

アイリーンは少し頬を赤らめつつもじもと前足を擦り合わせて俯いていたが、遂にその口を開いた。

「だって、カイトさんは……、わたしを庇ってくれた素敵な王子様ですもの……。」

「……………」

二の句が継げない、どころか体が硬直して動かない。冗談抜きで場の空気が凍りついてた。アイリーンのあまりに明後日な返答に、脱力し過ぎて熱が一気に冷めたと言い換えてもいいかもしれない。

何だよ？それ……、というのが俺の正直な感想だった。真面目に聞いた事が馬鹿馬鹿しくなった。

第一、王子様の部分は不問にしても、俺はアイリーンを庇った事は一度たりとも無い。俺の動線上にいきなり飛び出して来た彼女と衝突する事態を避ける為に、全力で危機回避行動を取っただけである。そもそもムックと競争などせず、あの階段との交差点の手前で一時停止をして左右の確認を怠らなければ、彼女とぶつかり

そうになるという事も起きなかった筈だ。責められる事こそあれ、惚れられる謂れはない。

「あら、この子達、急に静かになりましたわね。」

「本当だわ。さっきまでワンワンキャンキャン五月蠅かったのに……。」

頭上から声が聞こえてくる。見上げるとマスター達が不思議そうに俺達を俯瞰していた。所詮、彼女らは人間。俺達魔獣の言葉は判らない。当然、さっきまでの雑談も彼らにとつたら、犬がいきなりワンワンと盛んに吠え始めたと思つたら急に黙り込んだという不気味な現象として認識された筈だ。

「では、そういう事をお願いします。」

「はい、では……、生徒会長に良くお伝え下さい。」

「はい、分かりました。それでは……。」

どうやら、人間同士の打ち合わせも終わったらしい。アイリーンのマスターは踵を返し、俺達から背を向けようとした。

その時、マスターの腕に抱かれたままのアイリーンが去り際に俺にこう声を掛けた。

「じゃあね、ダーリン。また会いましょう!」

「あら、アイリーン。またどうしたの? 全くどうしたのかしら……。さっきから変よ。普段は良い娘なのに……。」

ガタンツと扉が閉まって彼女らが居なくなつた後も、何となく余韻のような妙な感じがして、俺は困惑していた。もう勝手にしてくれ。

「でさあ……。」

唐突にムックが口を開いた。

「カイト、お前、どうするんだよ?」

「何を?」

「彼女の事を、さ。」

「彼女の事ね……。」

俺は溜息を吐いた。

「なあ、ムック……。お前ならどうするんだよ？」

「別に良いんじゃないかねえか？可愛いし。」

「可愛いねえ……。」

確かにアイリーンは可愛い。恋人であれば嘸かし他の雄共に自慢できるだろう。

だがしかし、である。ただ単によけ損ねて自爆した男を、自分を庇ってくれた王子様と盛大に勘違いするような女を恋人にしたいかと訊かれれば即答しかねるというものである。あくまでも個人的な偏見ではあるけれども、ああいう惚れっぽい女の子って、他の男にも簡単に靡きそんな気がするのだよな。

まあ、何だ……。その内何かの拍子にああいう感じで他の奴も好きになって求愛するのだろう。少なくとも彼女にするのは御免だし、一夜限りの関係を結ぶとしても、一応風紀委員の使い魔として取り締まる立場に立っている以上、そういう事はしたくない。

まあ、成り行きに任せよう。そう俺は思う事にした。

そんな事を考えていると、ブオオオオオオオ……という轟音と共に、沢山の何かの集団が風紀委員室の前の廊下を走り去って行ったのを感じた。どうせ、変身能力を持つ魔犬や魔猫が、10分の1サイズ位の車の玩具に変身して廊下を集団暴走しているのだろう。最近ではよくある事だった。

人間同士のトラブルに対応するのが人間の風紀委員の役目なら、魔獣や超常現象絡みの案件に対処するのが俺達使い魔の役目である。特に暴走事件や凶悪事件等の緊急を要する案件は、パトカーに変身する事が得意な俺の専門だ。

「カイト、行きます。」

皆にそう言つて扉を潜つて廊下へ出ると、俺は10分の1サイズの、プッシュバンパーが前後に付いたフォード・クラウンヴィクトリアの白黒パトカーに変身すると、

「ウ——ッ！」

とサイレンを鳴らして走りだした。

第三話：俺の狩獵

>>カイト

猪に出会った。

新校舎の1階の廊下を90系マーク?の覆面パトカー（何故かVIP仕様）の玩具に変身した状態で、パトロールも兼ねて散歩していると、どす黒い焦げ茶色をした体長2m位の大きな猪が我物顔で闊歩しているのに出会った。どうやら近くの山が何処からかやって来て迷い込んだらしい。

既にその存在に気が付いた生徒や職員が居たのか、教室のドアや防火壁を閉めた上に障壁魔法まで掛けて教室の中に引き籠もったり建物の外に避難したりして、廊下は既に閑古鳥が鳴いている。居るのはただ、何か不穏な唸り声を上げる猪と、思念波を風紀委員室にいる仲間の魔獣に飛ばして緊急応援を出し、それに正面から向かい合った俺だけである。

取り敢えず、邪魔な上に怖いから、猪を追い払う事にする。

車の天井付いたカバーを捲って赤く明滅するLEDの反転灯を灯し、ヘッドライトやフォグランプも、果てはハザードランプやグリルの中に仕込んだ赤色の点滅式前面警告灯も含めて全ての灯火を点灯し、サイレンとクラクションを鳴らして威嚇してみた。

「ウ——————ッ！ビッビッビッビ——————！どっか行け！

……フゴッ!?おわわ……!」

調子に乗って挑発したら、猪に鼻で鼻先を思い切り弾かれ、あまりの痛さに驚いた俺は思わずバックランプを点けて後退した。

後から思えば、この時猪の迫力にビビって後ろへ下がってしまった事が行けなかった。奴め、俺が後退した分だけ余計に前進し、ま

すます間合いを詰めて来た。凄まじく怖い。早く誰か来てくれ。

ウ——ッ！

突如、後ろの方からサイレンの音が聞こえてきた。それも一つじやない！良かった、応援が来たのだ。

救援に来たのは、白黒パトカーの玩具に変身したムックと、車種こそ違うが似たような物に変身したゴンとジャックという、俺達と同じ年頃の子供の魔狐のコンビだった。

「助けに来たぜ！」

異口同音にそう叫んだ声こそ勇ましかったが、何故か三匹とも俺の3mも後ろで揃って停止し、それ以上近付いて来ないどころか、俺が後ろへ追いやられる度に一緒に下がって行くのだ。全く応援の意味が無い。役立たずめ！

立ち向かおうにも足が竦んで前へ進める気がしないし、たとえ立ち向かえたところで全然勝てる気がしない。頼れる筈の仲間はこの体たらくである。

押して駄目なら引いてみる。どのみちこんな狭い屋内では分が悪い。俺はこの猪を一先ずこのまま建物の外へと誘導する事にした。

「よし、仕方ないからこのまま外へ引つ張るぞ！サポート宜しく！」と、後ろにいる3匹に向かって号令を掛けると、彼らは一目散にウターンしようとする素振りを見せた。

「何やってるんだ、馬鹿！」

俺は思わず3匹に向かって怒鳴った。

「俺達が尻を向けた途端、奴が襲い掛かって来たらどうするんだよ？こう云うのに背中を見せてはいけないのは、鉄則だろう？このまま後ろ歩きで奴を外へ引つ張りだすぞ。」

すると、ジャックがこんな弱音を吐いた。

「でも、俺達。こんな感じで後ろ歩きするの、苦手なんだけれど……。」

大っぴらに言わないが、ムックとゴンもジャックの言う事に消極的に賛同しているようだ。たくつ、使えない奴らめ！

「ああ、じゃあ戻っている！ここは全部俺が引き受ける！」

俺は前照灯をハイからロービームに落とし、猪に向かって不規則にパッシングしつつ後方部隊に命令した。

しかしながら、後ろの連中は動く気配がない。

「どうした？これは俺一人で片付けておくから、お前らはもう帰っていいよ。」

と声を掛けると、ゴンが情けない声を上げてこう答えた。

「いやあ、我々も、仕事している、って実績を作らなくちゃいけませんから。」

「お前は何処の官僚だ！？」

もついい、勝手にしろ。

「あ、カイト君だ！カイトくん！」

突然遙か後ろからアイリーンの嬌声が聞こえたので、俺は嫌な予感と共に身震いした。そしてその後数秒も経たぬ間に、俺は彼女に思い切り体当たりを食らってつんのめった。

「ゲボっ！……な、何するんだよ？！」

俺は背中に押し掛かっているアイリーンに向かって抗議した。冗談抜きで猪の前足の爪に衝突するところだったぞ！

ところがアイリーンの奴、反省している様子がこれっぽっちもないらしい。

「え〜！何で？いいじゃない。」

「いや、いや！空気読んでよ！というか、前を見る！前を！」

彼女の目に猪が入っている事は考察するまでもなく明白だったが、

アイリーンは俺の背中の上から頑なに退こうとしなかった。どうやら彼女の瞳は、死角にある物どころか、視覚で捉えている筈の物でも自分にとって都合が悪ければ映らなくなる特殊な物らしい。

しかし、邪魔な物は邪魔だ。俺はアイリーンに懇願した。

「頼む、アイリーン。ここは危ないから、君は向こうへ退避してくれ！」

「嫌だわ！」

「お願いだから良い娘だから、俺の言う事を聞いてくれ。じゃないと俺は公務執行妨害の現行犯で君を拘束しなきゃなくなる。」

「わかったわ……。」

そうしおらしく呟くと、アイリーンは俺から離れた。おや？こいつも案外素直な所があるではないか！

そう、思わず感心しかけたが、次の彼女の言葉で俺はそうそうに前言を翻す事にした。

「それじゃあ、代わりに今度、わたしをデートに連れって行ってよ！」

「ああ?!」

何を言っているのだ、この女は……。唐突に支離滅裂な事を口にし始めたぞ。何で仕事を妨害されたから怒ったのに、代わりにこいつとデートしなければいけないのだ？こいつ、頭がおかしいのか？それとも俺の感覚の方が世間と掛け離れているのか？

兎に角、鬱陶しい者は去った。俺は改めてリバース走行を開始した。

「はい、おーらい！おーらい！猪さん、此方ですよー！」

猪を宥めながら、廊下を後ろ歩きで進む。やがてエントランスに辿り着いたのか靴箱が整列した広い空間に通リ掛かった。

俺はムック達と離れ、その靴箱と靴箱の間に出来た通路の一つにハンドルを左に切って右折し、猪を誘き寄せると、一気にバックス

ピンターンを決めて車体の前後を引つ繰り返し、リアタイヤをホイールスピンさせて砂埃を上げつつ急加速し、追い掛けて来た猪共々校舎の外へ飛び出した。

そして黒いアスファルトで舗装された校庭の上に躍り出ると、俺は玩具の車から実寸大の本物へと巨大化し、素早くスピンターンをして猪に真っ向から向かい合い、そのまま突撃した。

急発進したからだろうか、猪は吹っ飛ばされた拳句背中から俺のボンネットに叩きつけられると、そのまま弾んで屋根の上に飛び、最後には1.5m強の高さからアスファルトに落下して血達磨になりながら転がっていった。

死んだかと思ったが、まだ息をしている気配がする。下手に手負いした獣が暴れられても厄介だ。手負い猪という言葉もある。それに激痛に苛まれているだろう、可哀想だ。安らかに眠れるように気持ち良く止めを刺してやろう。

明日の給食には猪肉でも振る舞われるのかな……。そう期待しながら俺はバックランプを白く灯し、フルスロットルでアクセルを踏み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8596x/>

異世界で魔犬な生活

2011年11月17日19時36分発行